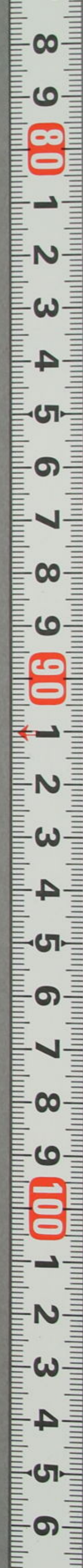




芳名抄

下

共
有
七



國書

新井白鐵 著



此書は... 新井白鐵先生の鬼神論... 宋張雨の... ぼくらの...

Fragmentary handwritten text on the right page, partially obscured by ink blotches and damage.

禱りてはたかきなりし人幼く千は小忽り西堂之腰
 一巻として能く興へて是れ日き津像を打とる月
 不其腹の中書雲の宿の箱を打破る中に雲
 なる雲の月を宿る箱を破る中を金銀の白
 雲に引とられりてく油に入し類類をりて是れ雲の
 影は長りしを形影の影を破りては塵下まきりり
 と母へのくも是れ暗病と止し咽喉をぬりかとする
 雲の心能くくく清見秋葉は江淮とのふの俗信祠
 を破る影のくく影の影を破りては塵下まきりり夏
 のくく清濁と雲は伍々存の影と母らばもを雲

風の心能くく清見秋葉は江淮とのふの俗信祠
 を破る影のくく影の影を破りては塵下まきりり夏
 のくく清濁と雲は伍々存の影と母らばもを雲

也言ふは因て是れ云ふは因て是れ云ふは因ては

附録一録二録三名在野澤と云ふ所の類ひ多し矣
 卒難哉おもしく子孫山邊谷の岡すすじ類なるの
 子孫少く云々其の説を辨る人なかりしひを辨ふて
 罵り喚ぶといれし傳來りて遂にその天物に山海經に
 天物やのすめのおれもは方の俗なり云々のと云ふ也
 是も本草辨るの附録小奉る方山都本末を云ふは物
 の類ひ恠多し見ざる其一物と見しつら其類同也
 の種類は草に多く類たるに従て獲へし扱之を雅なりん
 天物名義集と云ふ書に天物此事と書述するが條あり
 天物 云々の事多し 山内山天物小作 易記の如
 也 續中 雲霧等 扱何あり 其の意は目下れぬ也
 好くしと云ふ 是は 山内山 奥より 山内上りせ
 の事と見え 跡は かりに 山内山 市廣中 山内牛
 車は 体は 土と見え 六車の 腹を 畏怖 解と 是は 見え 者
 も 云ふ 又 蛇の 意は 土に 居る 大角の けし 万馬と 是は 解
 わり 凡 奇 怪の 類 廣く 山 幽 谷に 在り 任 事 あり 人
 里 村 市 町に 在り 亦 山 類 遠く 是 被 奇 怪の 事 の 位 云 人
 行つて 人 亦 被 驚く 目下 云ふ 山 云々 の 事 來り 亦
 奇 異 あり 云々

其 珍 書 方 類 也 写 本 云 云 書 目 云 天 物 事 在

左の傳傳の著者。正夜夜あるは是八百鬼六辨録
と云書にたりと何なり人等。はつて其書と
君のりたりと云り。と云る漢書。と云書は不
見ぬ。唯我や。と云と述り事右の云

○近き不厭就日と云事。とい流石申光。其外。と云
撰更。先。子。長。信。小。何。事。とい。人。を。彼。死。母。を。水。と
り。夜。と。初。じ。系。初。り。者。老。とい。宗。月。とい。所。も。京。村。町。の
宿。老。と。述。り。長。信。其。外。云。儀。ら。役。料。第。日。と。云
清。奉。仍。所。へ。初。り。世。人。不。厭。就。日。と。云。の。事。は。物。外
第。一。の。事。也。其。外。云。儀。ら。役。料。第。日。と。云。の。事。は。物。外

不厭就日。とい。流。石。申。光。其。外。と。云。の。事。は。物。外
看。初。の。事。は。三。夜。看。用。其。外。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
小。信。た。れ。也。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
成。は。人。信。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
心。方。と。信。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
一。地。も。信。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
無。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外
か。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外。と。云。の。事。は。物。外

寄下上御奉給の文上書きの个々御心腹の御侍老中云々一
程の御心腹貴方御心貴人御心付て下さり御心寄
なり今も御心付下さり御心寄の御心寄
日女又の御心 御心御心月女御心又御心寄 御心御心御心御心
西の御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心

の御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心
御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心御心

小巻の言と附し毎を也

或人等向て曰拙者いざ身代と云抱ゆにおまの如
小巻の言のよきは身代人の言と相違ひのよき言
然るまはゆきまはゆきの言并に相違ひの言曰
之身代某何人相違ひのよきは彼曰是は身代人
おまの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
抱ゆの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
人等曰人の言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
おまの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
くまの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言

病の醫者相違ひの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
相違ひの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
長壽の言はゆきまはゆきの言と相違ひの言

附録 日下等問の要旨を記す

○ 實之律の況

世人の言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
相違ひの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
くまの言はゆきまはゆきの言と相違ひの言
此等法を言はゆきまはゆきの言と相違ひの言

薄羅神はらうと云ふは、
 と云ふに會物と云ふは、
 日と夜と酒食と水の比とが、
 根財寶かとの貯へ何の
 少く求め難く満ちたは
 比ふ事と也。次は形も
 中を何れに世教のおも
 食のくさ敷くも向ひ背
 うらぬわけあり。また
 極き事と云ふは、
 人神と云ふは、
 類ひ是なり。比賣と神
 のの智と云ふは、
 かくく心也。類ひ是
 靈札枚高ふと。腰の
 後と云ふは、
 准并は、
 傳らしり、
 有様天と、
 と云ふは、

人神と云ふは、
 類ひ是なり。比賣と神
 のの智と云ふは、
 かくく心也。類ひ是
 靈札枚高ふと。腰の
 後と云ふは、
 准并は、
 傳らしり、
 有様天と、
 と云ふは、

武彦のしりしをこひ金湯たるは自由のこもたのこころ心
山に移りしにわれ忍れ懼るべき事も好く意へ思ふ
死を考へ出れればたのこころに飛びけきとて思ふものなきは
位不立安き事極まりなく少時なるにわらはれ位不立
親等の心所ら福入りの事

○聖人の恩徳と可和事

本義工高き收りて聖業の方術と云ふ免法をて世に立
を根たしんば聖人の法を立度法制と云ふ一は聖人の
心と云ふ聖人の心と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
徳をうらみと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

三つに分けて其の聖業日在りて是なりと云ふ事
味し極し徳事申す如く理小通し易し

○志欲之類を肝要とす

凡志をその致事何れと云ふは致事一乃致用志之のな
けいふ字同し然るに無能事も何れも致用事なり
徳字致事と云ふは志之なり志之なり志之なり
心考に致事と云ふは西も下是東へ色一是との如く
事決断するものなり是れ刀またとて絶力なりか
心考に致事と云ふは西も下是東へ色一是との如く
事決断するものなり是れ刀またとて絶力なりか
心考に致事と云ふは西も下是東へ色一是との如く
事決断するものなり是れ刀またとて絶力なりか

也。又節より、中道を以て能く不^レあはれむ
 事^レ喜^レ憂^レの煩悩即善^レ惡^レの對^レありと云^レる。憐^レ愍^レの者^レ
 又子^レ欲^レ棄^レてた^レ世界^レと云^レは、釋^レの語^レより、^レ此^レの
 後^レ、坊^レ主^レと云^レは、國^レの^レ主^レと云^レふ類^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 憐^レの^レ事^レと云^レは、憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 も用^レは、おの^レひ^レ先^レに^レ法^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 是^レな^レら^レば、制^レ則^レと云^レは、戒^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 の事^レ者^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 不^レ患^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 是^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ

此^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 字^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 一^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ

○老^レ作^レの^レ釋^レ字^レ每^レ一^レ凡^レ此^レ中^レの^レ說

釋^レ字^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 佛^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 又^レ一^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 釋^レ字^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ
 一^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レの^レ事^レ也。憐^レ愍^レ

一は信じて居たが、此の信のあつた人、
 首の也、欲深き懶惰まごも、背折る上、彼不妄文字、
 之傷へ、是れは、と信じて、薬の心、
 たりと、
 たか、
 僧は、
 遍参するや、世活春、
 此、
 日、
 曰、

一は信じて居たが、此の信のあつた人、
 首の也、欲深き懶惰まごも、背折る上、
 彼不妄文字、之傷へ、是れは、と信じて、
 薬の心、たりと、たか、僧は、遍参するや、
 世活春、此、日、曰、

國及中少作も世は其の治初字修の熱一なる言
徳のふえをさる風を安かづけ今まうけふ小徳
徳あり行ふ小徳すくも世の徳を確する
大徳也 世もさる風を安かづけ今まうけふ小徳
初め世は治と徳行ふ事と善と人か平の徳
徳をさる風を安かづけ今まうけふ小徳
徳人徳候は人を信一徳もさる風を安かづけ今まうけふ小徳
遺風今に治と徳行ふ事と善と人か平の徳
不荷もわれ世の事と善と人か平の徳
雷風今に治と徳行ふ事と善と人か平の徳

○世人の曰ふは政事の中原と取ふ付て世の中庸者不
忍國君との秋等と云ふは世の徳の衰へ事なりと一宗
行ひ其の古の徳の行ふに世の徳の衰へ事なりと一宗
今も示す事曰雷小過の柔徳小徳一徳あり世の徳
世の徳の衰へ事なりと一宗
世の徳の衰へ事なりと一宗

蘇軾曰小過者君弱而臣強之世也愚按四剛五柔之卦凡十六
卦非謂皆君弱臣強之世也蘇氏繇豫卦之例以發明小過之微
義蓋豫者剛直之臣輔佐柔弱之君之象卦德上動下順君民和
樂之象小過者上動下艱止者拒而不服又上下相反之象夫一

蘇軾曰

君之賢愚必關萬民之憂樂蓋聖如堯舜暴如桀紂者无常在矣
間有可稱賢明之君也其它不施仁亦不為虐是之謂庸君若有
賢宰輔佐之則可使其君不失令名哉无其德而在君位是之謂
不君有賢宰輔佐之則可使下民无及離散哉无目无耳不辨玉
瓦惟寵佞于己者以為賢是之謂暗君顧如秦李斯趙高漢王莽
唐二李安祿山宋王安石韓侂胄之徒皆姦黠沈曲巧蠱惑君心
握柄恣權釐政發萌則使官吏有司趨時附勢當此時也直者倒
曳枉者得志於是頻加租稅累罔市利都蠹鬻民間之財傳所謂
以官易富故也蓋為人君不察政道之所及不知百姓之安否如
清盲如矇聾以踐君位弗如无君孟子教誨齊梁之君雖事事相

切二君皆匪其器遂不能成治道以處翰音之位誨訓雖詳何補
哉猶臨死而服獨參也蓋姦賊值時即妖孽之兆也聖人恐其關
梗于君民之情故曰公弋取彼在宄求正臣以為唇齒之謂也
或人又曰君之惡乃多乃婦人之口一或長于口一乃事
聖人自出也述易注云一少人言易者云小
而心也天風垢之彖傳乃附記を奉りの
夫夫者天下有道則賢臣決逆隱隱佞姦從容而不怠惰不酷甚
利有攸往而剛能長矣天下无道則貪臣汚吏以奸巧過刻左貶
直臣以威虐非理制伏小民所謂潰決是也夫始者天下有道則
剛德之臣遇中正之君乃致大行於天下也天下无道則婦女遇

闇劣之君貪臣汚吏為之阿諛磨折以財發身靡然為風習悠然
待承平不知一陰已生于下而不可以長為无憂之世也世之所
謂安者必危之伏也世之所謂治者必亂之幾也蓋有位者不必
有德有德者不必有位自古貴人皆長育婦女之手其成養之之
道唯是以尊敬恐懼為事以无違其意為要然老於一宮一室之
中自匪其天質俊傑皆是白髮之兒而已故不通人情真偽不知
國風美惡況於民間陰曲機術紛紛之事乎因之奸賊能巧塞其
耳蔽其目而自驕揚雖太宗英主入李義府殿中又李林甫巧迎
合上意以圖其權褒貶出其意以張其勢天下懼伏側足以成天
下之亂而玄宗不之悟且又楊國忠獻嘉禾之姦黠亦信以為然

況於闇劣主乎嗚呼如太公遇文王則吾不可得而見之矣待是
賢臣遇庸君斯可矣然後細民弗泣於市賢能弗斃於野
或人又曰君臣之奸今于今之令也固知君之奸者或君
言小官之奸易得也或君之言也今雷地豫之象傳也豫於
豫六二象傳曰不終日貞吉以中正也古者彭越左之
人皆附驥尾而競沾福我惟恐有奇福者必有奇禍故樂以道而
不願暴發之富不欲分外之樂此以中正故也凡人見幾如此則
豈駕蓄害乎

右傳の奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき奇れき

の奇なりは及云亦世の人丁亦あり又も大事を以て
今よりありしにぬ

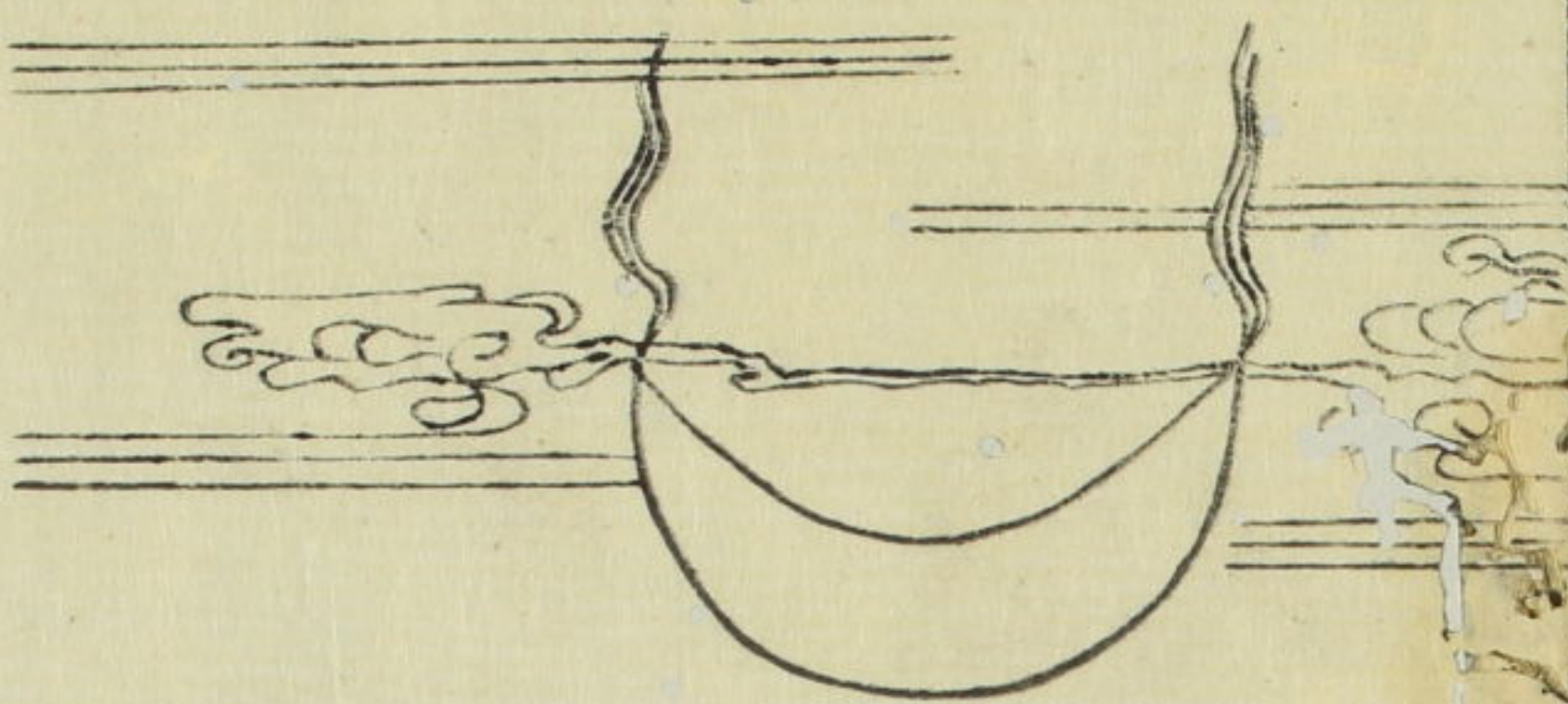
○字同と字文のちをりて事

字同と字文とを我と有り字同と有り及の作用を字の
中易小の所の窮理盡性に至り今等れ事ありて中
物身中庸の性乃教之字乃明德又海路の門者各同然
然て支子又ありて尋得と精冠小學の字教乃中意深理を
我必伴にらとと微遠發明せしと今日人も切不問てを
おりの字教乃字教と能く懐念限毎一夫と中稟のる
の徳中人等もみ扱小一生自也後持行ふ能るふ

乃字同と字文のちをりて事
小とるに礼とてと又文字乃小性く文を字人てれを約
字同の書を後とあり皆書籍とる及入事之但漢土
中て徳とのた日本乃書徳とくとりて書とて
其義を解し通ずり成りし其字とて是てふはたりの
事なりとて扱世小及て文字も是く難書とてお意小
理合すりくふんを肝要代書交聖字の中とて及り統
其文字の同とて及て字同とて及る長る信儒の教漢也聖字月
在り是く万書儒者の教とて及て及れは事とて及り
文字を及く書物をもはりし事ありん小信儒の書儒乃

○大志我の月見説

或人曰世俗小七月在去秋の月見其之云乃汝能辨
 との事其の理や言ふ是説かすも其まき其形也
 おり其其はしめ世にその要を妨まなすといひ
 多無俗を惠けし細きりといふたりはり其言は七月
 たるを心とてその事冊中て七月は月あなるとい河内小
 ては十二月たつたといふ京都めんは山屋を言ひ其
 いぬりのおれをまを東と結入も外一書其言は
 何んを別ある事の人や其言は月乃斜形と
 西にあり其の光りあり今圖とて示す



月乃出かくのこも斜しく直云小并
 初の時雲れ離を際して左光の角は
 先を教よりはるをむり雲と見
 右光とひくく月乃のれ方は
 とも見事其の電光のこも見さむ
 まも外一其言の角よりとて
 止れと見るより小月れ出るとい
 かりぬの中よりあり光りは名へる事なり能
 ぬても身よ月の影の回たなり申より出る光り
 といふのこも月斜て昇る時と云を離る時と云ふ

大志我

十五

なれば見ゆ又山更なるも真に示るる事なり交結ハ
たすふなきうらたに家の中圖のこゝ野を以て凡
何れと云ふは是れ之を以て法院と見ふに眼病然る人なる
魚にびくぬる人の近居に居りて其の山圍に與ふれば慧
甲を外凶星學を以て法に對し其の事也結成も夫ハ
世界各國只この天を以てを理を以てゆるとも是れ其の
やうに空乃事やうに日本此事也其國に法美の申やん
難ふ今一次に其いふこと同く近居の意に其の山圍ある
ふり人の目のもと之に他は必し人其具はぬなりをこハ
かくるも其天意の以てかゝるものと見えて日本に人乃目

其具はぬに推して其の中に出美を以て其國のこ
目の前を以て眼病然る事の内目前に其記を以て其
可の如くおもふも其是れよくあはれなり其の如くも
眼にまひたれば人の目もかくるなりと云ふに明か
證なり其證なりと目も其花と見たりと云ふに其證
那も平なりと耐意とて其花を以て其具を以て其花
也其花之氣ははらけり童子曰然れと言ふれば其花を以
たりとて其平侍に在りて其花を以て其具を以て其花
を以て其具を以て其花を以て其具を以て其花を以て其具
たがふに下と云ふれば其花を以て其具を以て其花を以て其具

希りなき言も何れも聞きしとて祖文をいふよりききぬ
のまゝに然る言は詞法を具してりとの事とて有る
しなるといふ言は信のぢぢぢも言ひさしぬとて
必定ありき事とて

○吾人信と信

或人曰我町街を往來するも夏過とサシガク城唱方
表の門なるをぬきを家代事なる文首回るとも言ふ真不
乞食深る万早とてその言は西國順紀多しとて
とて於て其言も先づ信持神符定安寺は持如言に
前をてて後をててしなれば誠如言たるなり

せめて一書月をいへる万ものも今も一書月を
そ路平三所の信寺に傳りたる傳より二年之久信
一人如言の言も信の言もいへる今も信言は信
言とて信の言もいへる今も信言は信言の
言も信言の言もいへる今も信言は信言の
信の言も信言の言もいへる今も信言は信言の
の言も信言の言もいへる今も信言は信言の
言も信言の言もいへる今も信言は信言の
言も信言の言もいへる今も信言は信言の

○韓非子説

下

ひし慎子といふ韓非子小謂て曰く古者愚さるる
時の勢ひを得り事お要なり既小辯之能入とのふも匹
夫あり在り附たんと店め化すりも外堯の大臣と成
ては能氏と店め又天子となりて正てを面と天子成
治心物以附室を治り勢ひより不化也と韓非子曰
さういふ守其の權下り事也とてこれを能也も
附を得之ん也と云々蛇蝎（蛇の京ふてトカキと云ふ）也も附と
いふも雲とたぬなりとて能也の形より不化也を附也
なり定て補助兩等なり能也の形より不化也を附也
能也なり是附のふ不化也也て時勢とたわ何れも附也

能也もさるるを予けとたわ何れも附也の
何れもさるるを予けとたわ何れも附也の
能也もさるるを予けとたわ何れも附也の
能也もさるるを予けとたわ何れも附也の

○易筮の卦乃要法

筮乃要法之易卦節の卦を能也也て宜也といふ
と爻一節の節の要法なりとて何れも附也といふ
心中庸の乃理又推運の妙用も能也也て宜也といふ
例二二三爻の左に也とて能也也て宜也といふ
一老成の能也也て宜也といふ

今の世は此の世に比して、事具の多し、而して多し、其
を以て理の通一、物毎字の如く、事色や、其の如
く、自操と成熱し、若くは下りも、信の毒く、信た方、其
世の是を、其の概、高たの理、其の如く、不難、其の如く、其の如く、
能あり、賢徳の、何れ、其の如く、老入、其の如く、其の如く、
短智、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
不破、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

一古語、不醫之世、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
醫と、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
療治、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

理あり、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

一、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、
其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、其の如く、

下民の志あるん

徳政の事代研正録小述に述ぶ

有る事道小治を節事考へ陳推く

○各番の代一向に同れもす度あるぬめり

本とく度す福するべき

○事人徳約と事人の活

じり東武に徳事といふ事高し徳約と事り

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

徳門下目と友なりと来ると曰思惟

扱は才敏^{さいびん}、其の道^{みち}も其の才^{さい}に依^よりて、被^かた^たる^る之^の刻^{とき}、
隙^{ひま}と^も同^{おな}じと^り居^ゐる^る、何^{なに}も^も明^あり^のの^り、
被^かた^たる^る、
う^らく^とと^もめ^め居^ゐる^る、
是^{これ}は^は大^{だい}に^に出^いで^て、
及^{およ}び^び、
こ^この^の父^{ちち}は^は、
好^{この}人^{ひと}は^は、
好^{この}人^{ひと}は^は、

○孝子可受不順乃子可罰

衣^い僕^{はく}人^{ひと}が^が、
て^て各^{おの}半^{おの}、
た^た方^{かた}、
人^{ひと}と^と同^{おな}じ、
之^{この}の^の別^{わか}れ、
物^{もの}を^を、
善^よし^しと^と、
も^も不^よ好^う子^こも^も、
正^{ただ}し^しな^な、
孝^{この}子^こ、
刑^{けい}に^に、
教^{おし}へ^へ、

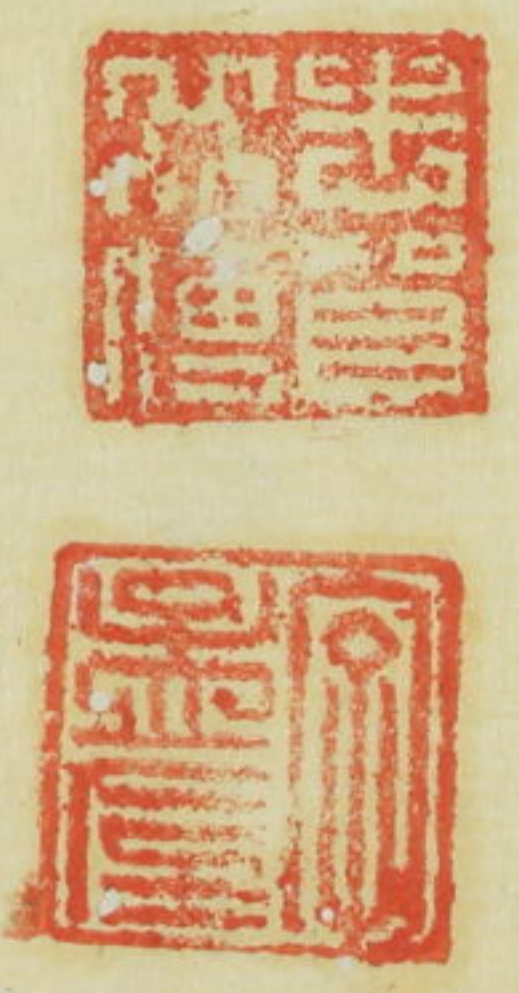
罪を小人にたゞらざるは徳に於て刑罰の政を以て思惟
 小官の威徳を信するに非ざるは徳に於て刑罰の政を以て思惟
 恐れず信するに非ざるは徳に於て刑罰の政を以て思惟
 身今孝行の子弟賞せんも不順の子を教へて
 戒めりて身責を恐れ強て信する孝のあらざる
 不孝の罪を述べせむに母も同母来も不孝の罪を
 色不肖とて教へざるも不及の事曰汝書を讀んで
 義と信する不肖とて教へざるも不及の事曰汝書を讀んで
 汝此の事不孝を信集徳と述著安んじき後節
 世に公出たて今汝の如き孝行を徳するは徳に於て

律條に一徳獲まうとたてしは孝子に上るは徳に
 まうとたてしは徳獲まうとたてしは孝子に上るは徳に
 事必する徳に於て徳に於て

○は書の内容不孝不順の子を罰するたの所
 孝子も多し人事刑に服し徳に於て不述し
 ○不述するに知るの事不順とて徳に於て不述し
 逐刑は書に及不明徳の新獲樂ありて書に下る
 逐刑は書に及不明徳の新獲樂ありて書に下る
 第一の書者之歩射騎射並懸流痛の八的之九
 爲れよの如く逐刑は書に及不明徳の新獲樂ありて書に下る

少古傳入心に書し下見ヒキ方心學人志意もあつて
 見ざるに況や其心致もや學問も君は君の學問の
 徳生字同なふと應かゝる處の石宗乃びて
 君もて論るべしと云ふ

闇の曙下終



浪華書林吉田松根堂藏版書目		心齋松逸安土町北八	
四書集註	林道春點大字	南畝別志	祖來先生隨筆
論語徵	祖來先生述	聖學自在	和歌世語添
同 正文	益田先生校訂	闇乃曙	新井白蛾著
論語徵解	中根紀先生述	牛馬問	同著
近思錄	半紙形	講習餘筆	蘭林先生編
全文抱朴子	吳興郡山人慎懋官著	先達遺事	稻葉正信著
韓詩外傳	韓夫子著	近世叢語	九華角田先生著
孝經大義	道春點大字		
同 詳解	蘆川桂洲著		
國語正本	章註改點		
搜神記	晉子審令升著		

藏書目錄

癩書目録

藥徵 東洞先生著 三

續藥徵 村井先生著 三

東洞遺稿 東洞先生試効方 三

建珠錄 南涯先生試効方 一

續建珠錄 堀江先生著 門人著 一

辨醫斷 田中牧齋著 二

醫方圓機 此書凡三例一微一內一上三分子理氣理血劑一寒熱病及之瘡癩雜劑水草一ニ至ルマテ悉ク記シ医道ノ便用トス 飲肥桑原先生著 二

產航 此書ハ孕婦産前後ノ諸症ヲ論ジ且數人ヲ療シテ最其功驗アル方ニ著シキモノト助タラシム 王篤菴玄順著 二

治痢經驗 附和漢人參考 此書ハ痢病ヲ治スル專論ヲ參テ并ニ參ノ諸品ヲ明ニ辨ス 堀蘭菴先生著 二

幼科秘録 二

古文眞寶前集 片カナ附 一

茶山先生花月吟 小本 一

三字經國字解 多賀主一解 一

訓蒙要言錄 羅山先生著 三

貞觀政要諺解 林道春先生著 五

通俗千金寶 毛利貞齋著 十

法曹至要抄 坂上兼明著 三

此書ハ漢海冬嗣公此宗公時平公等の撰せられたる律令格式の中より法海の必要とすべしとあるを

漢土ノ書ニ廣類願體律ト云ヘルヲ俗ニ通ジ安ク註釋ス 此書人ノ心得ノコトヲ章句ヲ分チ廣ク編集スルノ教諭ノ深切ナル一修身齊家ヨリ医方養生ノ事ニ至モコトクク載備テ致ラズト云フナリ

此書ハ唐ノ太宗群臣ヲ聚メテ國家ノ政務ヲ論セラレテ記録ニシテ殊ニ安ク註解シクルモノナリ

漢土ノ書ニ廣類願體律ト云ヘルヲ俗ニ通ジ安ク註釋ス 此書人ノ心得ノコトヲ章句ヲ分チ廣ク編集スルノ教諭ノ深切ナル一修身齊家ヨリ医方養生ノ事ニ至モコトクク載備テ致ラズト云フナリ

此書ハ漢海冬嗣公此宗公時平公等の撰せられたる律令格式の中より法海の必要とすべしとあるを

金匱小兒方 小本 一

丸散手引 横本 一

九散手引 横本 一

醫療察病考 山和順著 小本 三

此書ハスベテ病症ヲ細テ病因ヲ考ヘ診察ヲ詳ニ并ニ經験ノ方ヲ出ス疾ノ機ヲ察シ變ヲ迎ラントスルヲ先知リ或ハ輕重ノ虛實トテ明ラメ寒症ト熱症トヲ辨(或ハ治スルト治セザルト死スルト死セザルトヲ決シ或ハ攻ムベキト攻ムベカラザルト補フベキト補ムベカラザルトヲ斷ジ又養生ヲ以テ治スベキ症ヲ治法等ニイタルニテ其法ヲ詳ニ説ス

秘傳長壽法 繪圖入 二

小兒養育艸 香月牛山纂補 五

附痘疹心得草

此書ハ小兒也生ヨリ養育ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ飲食衣服ノ事モ其ノ中ニ在リ生後ノ病ヲ治スルノ方ヲ示シ且ニ痘疹ノ病ノ治法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ小兒也生ヨリ養育ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ飲食衣服ノ事モ其ノ中ニ在リ生後ノ病ヲ治スルノ方ヲ示シ且ニ痘疹ノ病ノ治法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ小兒也生ヨリ養育ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ飲食衣服ノ事モ其ノ中ニ在リ生後ノ病ヲ治スルノ方ヲ示シ且ニ痘疹ノ病ノ治法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ小兒也生ヨリ養育ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ飲食衣服ノ事モ其ノ中ニ在リ生後ノ病ヲ治スルノ方ヲ示シ且ニ痘疹ノ病ノ治法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ小兒也生ヨリ養育ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ飲食衣服ノ事モ其ノ中ニ在リ生後ノ病ヲ治スルノ方ヲ示シ且ニ痘疹ノ病ノ治法モ其ノ中ニ在リ

贅語 梅園三浦先生著 二

詩轍 此書詩學必用ノ事ヲ洩サ片カニ記ス 聊詩門ニ臨ミ徒ハ必見ルニ速ニ名処ニ到ラン 初編 六

蘭室先生詩文集 續編 十二

唐詩合解 高廷禮選 十

唐詩正聲 高廷禮選 四

熟字彙馬 小本 二

此書熟字ヲ廣ク集メ門部并ニ字數ヲ分チテ詩作熟字ノ早引ト謂フニ譬ハ一門ノ内ニテ三字ノ熟字ヲ索メントナレバ(四)三字ナレバ(四)四字ナレバ(四)ト知ルベシ且熟字毎ニ一ヲ以テ平仄及テ分チモツハ便用タラシム

熟字小牋 小本 二

日本詩故事選 小本 二

此書ハ帝王 諸王 官家 武臣 神仙 隱逸 袖子 官閥 等ノ類ヲ分チオノノ其傳ヲ記シカクハラニ先哲ノ詩語ヲ撰出シテコレヲ作例トス

手相卽坐考 荻塚齋先生著 小本前後 二

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

此書ハ手相ノ法ヲ詳ニ論ジ且ニ坐考ノ法モ其ノ中ニ在リ

疱瘡咒調法記

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也
其ノ方ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

紅丸

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

同 美面定

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

婦人

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

安産道

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

永代調法記寶庫

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

歌仙二葉抄

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

職人盡歌合

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

はし

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

源氏物語小鑑

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

同 男女裝束抄

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

職官志

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

書翰初學抄

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

增補日東尺牘

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

尺牘道標

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

尺牘楷梯

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

尺牘清裁

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

尺牘奇賞

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

書簡啓發

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

句雙葛藤抄

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

天地萬物造化論

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

陰陽方位便覽

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

陰陽五要奇書

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

町見辨疑

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

萬年大雜書永代曆

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

畫圖百花鳥

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

職官志

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

同 男女裝束抄

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

職官志

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

職官志

此書ハハコトコトノ神符ヲ用ヒテ瘡ヲ治スル方也

校正新撰姓氏錄

稻彦天人校訂 音引附

四

神代卷鹽土傳

谷重遠著

二

中臣被鹽土傳

同著

一

土佐國式社考

同著

一

俗説贅辨

同著

四

東遊記

福南齋先生著 繪入 前後十

十

西遊記

同著 同 前後十

十

法華安心紀物語

繪入

二

番神問答

日達著

二

番神問答抄

日達著

二

鎌倉殿中間答記

日達著

二

鎌倉殿中間答記

日達著

二

日蓮上人御傳記

繪入

十

草彙

枝崎三嶋先生輯

四

童子筆道三部書

沙門鑿靈述

三

書喻

此書ハ古今書法ノ異同オヨビ草隸ノ辨アルヒハ假名ノ

觀鷺百譚

廣澤先生著

五

筆法温知書

藤田真跡

一

辨接帖

不陰天人書

一

御式目録

繪入

一

御式目録子訓

繪入

一

心學五常辨

繪入

一

道二心童蒙訓

繪入

三

闇路提桃灯

洛西七士著

二

女五常訓後編

具原先生著

二

女五常訓後編

繪入

一

風文齋書畫譜畧 頼先子関 三

此書ハ漢土ノ上古ヨリ清朝ニ至ル書画ノ姓名ノ字
号ノカギリニテモ委シク記シイロハ引ラテモ素ニ便リス

明 練陵甘賜 旭述 一

清 劉光君原校 一

此書ハ上ニ篆原ヨリ起リ印論ハ秦漢ヨリ明清ニ至ル
各朝ノ賦製品類鈕形等ノ精論ヲ萃ゲ且肉製ノ方
ニ至ルニテ悉ク載テ洩スナシ

茅州水母馨編 二

石印集註 一

此書ハ石ノ式法ヲ中ノ次第ノ次第ノ石ノ形ノ刻
字内ノカギリニテモ委シク記シイロハ引ラテモ素ニ便リス

長安假名所節用集 一

此書ハ假名所節用ノ書ノ形ノ刻
字内ノカギリニテモ委シク記シイロハ引ラテモ素ニ便リス

増補好文節用集 一本
世話字引付 一

中將基絹節 三
小本 一

大將基絹節 同 三

女子訓抄草 貝原氏撰 四

此書ハ女子ノ教訓ノ書ニシテ女子ノ行儀ノ
善クシテ女子ノ行儀ノ善クシテ女子ノ行儀ノ善クシテ

井沢長秀著 五

大和女訓 五

此書ハ女子ノ教訓ノ書ニシテ女子ノ行儀ノ
善クシテ女子ノ行儀ノ善クシテ女子ノ行儀ノ善クシテ

井沢長秀著 五

男子訓 三

此書ハ文武教武具軍用具軍用具軍用具
條ノ傳ノ善クシテ男子ノ行儀ノ善クシテ男子ノ行儀ノ善クシテ

同著 三

廣益俗說辨 廿一

此書ハ俗ノ書ニシテ俗ノ書ニシテ俗ノ書ニシテ
俗ノ書ニシテ俗ノ書ニシテ俗ノ書ニシテ俗ノ書ニシテ

井澤長秀著 廿一

今昔智雄鑑 十

此書ハ漢ノ名賢良將ノ傳記ノ中ヨリ智術ニ明カナル言行
ヲ書集メテ人々ノ采覧シタラニ於テ必明智ナラシム

藤樹先生著 十

古今立花指南大全 一

此書ハ立花ノ書ニシテ立花ノ書ニシテ立花ノ書ニシテ
立花ノ書ニシテ立花ノ書ニシテ立花ノ書ニシテ

藤樹先生著 一



